菩提山本願信円の夢

大原眞弓

はじめに

平成四年に「和州菩提山正暦寺中尾谷と浄土信仰」と題して、『史窓』第四九号に載せていただいたことがある。その時、触れられなかった「正暦寺中興開山信円」の事績を記してみたいと思う。

奈良市街地から東南十キロメートル近く離れた山中、菩提山（ボダイセン）の地にある菩提山真言宗正暦寺に私は今、住んでいる。

正暦寺は、正暦三（九九二）年に一条天皇の勅願寺として創建され、八六の房舎を持つ大寺であったと伝えられる。近年は清酒発祥の地として注目され、中世、本山興福寺大乗院と壺銭[1]をめぐって抗争が絶えなかったことでも知られる。

正暦寺の存亡に関わる初めての危機は、治承四（一一八〇）年の平重衡南都焼き討ちである。その年、本尊薬師如来倚像を残して全山焼亡。この荒廃した正暦寺を復興したのが信円である。信円は別当として、興福寺再興を推行する一方、正暦寺の復興と自坊正願院の建立に半生をかけた。信円をそこまでさせた菩提山の地への想いとは何だったのだろうか。その一端を「信円の夢」として探ってみたい。

信円自身が自分の夢を語った記録はない。が、彼の秘やかな夢の集積が、正暦寺内の別院「正願院・常光院」であったと推測する。

一　信円の生涯

1　出　家

信円は、仁平三（一一五三）年、摂政関白藤原忠通[2]と中納言源国信の女俊子との間に生まれた。同母兄に松殿基房。また、近衛家の祖となる基実は信円の母俊子の姉、源信子であって、血縁から見ると極めて近い間柄である。他の異母兄弟としては、三歳年上の九条兼実とその同母弟慈円。慈円は『愚管抄』の著者として有名である。崇徳帝の皇后皇嘉門院聖子は異母姉であった。

摂関家の一員として生まれた信円は幼くして、氏寺興福寺の恵信に入室、出家する。応保元[3]（一一六一）年、九歳の時である。入室の儀は九条兼実の息良円[4]の入室時に再現されている。入室の挨拶の時の引出物は、洲浜に鶴が立ち、巻物をくわえている置物である。そして、南都に下向する際は、師と共に車を連ね、随身、僧、共人（家司か）、侍、仕丁合わせて二十人近い一行となった。

最初に入室した恵信は、父忠通の長子で、三九歳年長の兄であった。師範[5]は教縁、学師は硯学で聞こえた蔵俊である。

信円略年譜（表一）

西暦	年	年齢	事項
一一五三	仁平 三	一	父忠通と中納言源国信女俊子の間に出生
一一六一	応保 一	九	異母兄恵信に入室
一一六三	長寛 一	一一	恵信、大衆により追放
一一六四	長寛 二	一二	父、忠通没す
一一六五	永万 一	一三	この頃尋範の弟子となる
一一六六	永万 二	一四	一乗院院主となる
一一六七	仁安 二	一五	恵信、伊豆に配流
一一六八	仁安 三	一六	維摩会研学竪義
一一七二	承安 二	二〇	維摩会講師　一乗院院主をやめる
一一七四	承安 四	二二	尋範没す　大乗院院主となる
一一七七	治承 元	二五	一乗院・大乗院兼帯
一一八〇	治承 四	二八	学師蔵俊没す　同母兄基房配流　平重衡の南都焼き討ち
一一八一	治承 五	二九	別当補任　権別当覚憲　基房息実尊が入室（2歳）
一一八五	文治 一	三三	東大寺大仏開眼の呪願師
一一八七	文治 三	三五	兼実息良円入室
一一八九	文治 五	三七	別当辞任
一一九一	建久 二	三九	大僧正・法務共に辞退
一二〇三	建仁 三	五一	東大寺大仏殿落慶供養導師
一二〇七	承元 一	五五	九条兼実没す
一二二〇	承久 二	六八	良円没
一二二四	天仁 一	七二	菩提山において没　菩提山本願僧正と号される

興福寺は藤原氏全体の氏寺であったが、ほぼ官寺に列し、摂関家が積極的に関与するのは永久四（一一一六）年、忠実が春日社に西塔を寄進し、春日御塔唯識会が催されてからである。保延二（一一三六）年、忠通による春日若宮の「おん祭」始まる。この時期になってようやく興福寺に氏寺としての「御寺」[6]、春日社は氏神として「御社」と再認識されるようになったという。

摂関家に関わる法要のために荘園が寄進され、同時に摂関家出身の子弟が、貴種として若年で出世し要職を占めるようになった。貴種の僧が住む院家は多くの荘園を領有し、門跡寺院として、寺内で大きな勢力を持つ。一乗院と大乗院がそうである。この素地は、一一世紀後半、藤原師実息、覚信の一乗院入寺以降、形成される。

一二世紀に入ると、忠通の興福寺介入が顕著となる。覚信の後、一乗院院主であった玄覚（覚信弟）に、恵信を入室させて、将来の布石とした。しかし、忠通が大和国検注を行うや、興福寺大衆は猛烈に反発した。保元の乱後、忠通の政権が確立すると、恵信は寺内の忠実・頼長派を押えて、保元二（一一五七）[7]年ようやく別当に就任した。しかし、尋範（覚信弟・大乗院）のように反忠通派も温存され、また、前の別当隆覚辞任の件に忠通が関わっていたこともあり、忠通・恵信への反感は根強かった。信円が恵信のもとで出家した応保元（一一六一）年の興福寺は、一発触発の状況にあった。

長寛元[8]（一一六三）年、衆徒が別当房に押し寄せたため、恵信は京へ逃げ、反撃を試み南都へ攻め寄せた。三日間の合戦のあと恵信は敗北する。信円一一歳の時である。『簡要類聚抄』によると、信円は恵信と共に在京していたが、兄基実の計らいで興福寺に戻り、改めて尋範の弟子になったという。以上は大山喬平氏[9]が『近衛家と南都一乗院』で綿密に論考されている。

信円[10]の法要デビューは仁安元（一一六六）年の方広会竪義、一四歳の時である。前年に一乗院院主となり、仁安三（一一六八）年、一六

歳で研学堅義となった。その間、恵信[11]は再び興福寺に打ち入り、大衆の訴えによって罪を着せられ、仁安二（一一六七）年、伊豆国へ流され、当地で没した。

その後、信円は一八歳で少僧都に直任。承安二（一一七三）年、二十歳の若さで維摩会の講師となった。維摩会は興福寺の法要の中でも最も伝統的で権威があり、国家の管理の下で行なわれた。その講師を勤めた者は已講と呼ばれ、僧綱に連らなる資格が与えられた。信円は貴種故に異例出世を遂げたと言えなくはないが、維摩会講師に耐えるだけの実力を身に付けていなければならない。その実力は学師蔵俊のもとで培われたのである。

蔵俊は法相宗随一の学匠として知られ、多くの秀れた弟子を育てている。信円以外の弟子として高名なのは覚憲である。覚憲は南都焼き討ち翌年、権別当として別当信円と共に興福寺復興を果している。彼の甥に有名な笠置上人貞慶がおり、蔵俊・覚憲・貞慶は当時唯識三大学匠と言われた。僧侶の堕落が言われる時代に伝統的[12]な唯識学を究め学徳兼備な蔵俊は、南都仏教復興の祖と評価されている。

蔵俊[13]は巨勢氏出身。大和国高市郡池尻村の「茅屋」で生まれたがその業績の故に、身分を越えて高く評価された。信円は高潔な蔵俊を一生の師として敬愛していた。蔵俊が維摩会探題補任の誉れを得た時、出立する蔵俊に向い信円は「師資之礼」を致し、「威儀之厳」を成した。身分上下の厳しい時代、これは破格なことで、「修学面目、誠絶古今」と後世の語り草となった。正願院の仏事の中に蔵俊月忌が組み込まれているのは、信円の心情の表われと言えよう。

さて、若年から親交が深かったのは異母兄九条兼実である。

二十歳[14]の時、信円は別当尋範の春日社参詣の伴をする際、兼実に半蔀車を借り受けた。兼実は、車に牛、牛飼、車副四人、任丁も付けて南都へ送っている。

二四歳[15]の信円が、初めて最勝講師となった時、兼実は「分明覚釈、又所作之体太以優美」と手放しでほめている。前年、皇嘉門院御供養で「無骨」と兼実の目に映った信円が、この時、見事に成長をしていたのである。

兼実[16]は信円と法宗宗法文を談じ合った時、「雖二年齢未レ閑、能練二習法文一、尤可二歎美一」と信円の修学と才智を称賛している。

法華八講講師[17]として参内した信円を、兼実は自分が使っていた直廬西庇で休息させ、「削氷瓜」をふるまったというエピソードはほほえましい。

兼実と円信の交流は『玉葉』を見る限り、嘉応二（一一七〇）年から建久九（一一九八）年まで三十年近く続いている。兼実は信円に興福寺の様子を聞いたり、春日詣の手配、個人的祈禱を依頼したりしている。こういう親交の中で、兼実の息良円が信円の正統的後継者の一人となったわけである。

承安三[18]（一一七三）年、師尋範は多武峯が焼けた責任を問われ別当を解任されて、内山永久寺に籠居したまま、翌承安四（一一七四）年永久寺で入滅してしまった。永久寺は鳥羽上皇御願の寺として、永久年間に建立、大和国、石上神宮の南方、山辺の道ぞいにあった。五十余の堂舎を持つ大寺であったが、明治の廃仏毀釈で徹底的に取り壊され、今は池のみを残こす。

尋範の死で、大乗院、禅定院、龍華樹院（後世、この三院を「三箇

院家」と称す）と大乗院が統括していた末寺（長谷寺や永久寺他）を信円が受け継いだ。

安元三（一一七七）年、興福寺内は「寺中偏如二戦場一」となり、信円は京へ逃上った。現体制を批判する範玄の後白河院方と、院の介入を排除し院が領有する興福寺別院の返還要求する大衆方との反目が激化した。その結果範玄は解任され、範玄が院の意向を受けて知行していた一乗院はもとの院主信円に返還された。信円は一乗院・大乗院を兼帯することになった。

2　興福寺再興

治承四（一一八〇）年一二月二八日、平重衡の軍勢によって東大寺大仏殿、興福寺一円が灰となった。この年は信円にとって心痛む年であった。前年治承三（一一七九）年、平清盛に反発した兄基房は、摂政を解任され九州へ流されることになった。治承四（一一八〇）年九月には師蔵俊が入滅する。

興福寺内は、平家方の別当玄縁が春日社社司と共謀して春日御正体を福原へ移そうとしたので大衆がとがめたという噂が立って、寺中騒然としていた。

治承四年の兵火は東大寺、興福寺に甚大な被害をもたらした。興福寺三綱が提出した南都焼失注文を見ると興福寺はほぼ壊滅状態で東大寺も大仏殿が焼け大仏の首が焼け落ちた。

信円が兼実に送った手紙では、金堂の十一面観音像のみ搬出できたという。

こういう状況の中で信円は興福寺を建て直す責務を負って別当に就任した。二九歳。権別当は覚憲、共に蔵俊の弟子であった。

興福寺は官寺と同じであったから、早速、造興福寺使が補任され、金堂は朝廷が、南円堂、講堂、南大門は氏長者が造営、食堂は興福寺がすることになった。

興福寺復興とは、伽藍の造営だけでなく、仏像、仏画、仏具等を新たに作り、経典類の再刊、寺内組織の刷新、治承五年に没収された大和国一円の荘園の復活等多難な事業である。

安田次郎氏は『中世興福寺と菩提山僧正信円』の論考の中で、信円が領有する喜多院二階堂をめぐって、「領主・地主にはたらきかけ、田畠の段別に米あるいは油の奉加を得るという形で喜多院二階堂の興行を行なっていたのである」と述べている。また、食堂が「寺僧同心合力」で再建された過程を分析し、結果として治承五（一一八一）年に朝廷に収公された大和国支配は興福寺に戻らなかったが、「興福寺の寺僧たちは、堂塔の再建を朝廷に申請し、大和国内の各自の所領を申告して、食堂造営段米を負担することになった」寺僧の所領申告をうながす働きかけを、安田氏が一種の「勧進」だととらえておられるのは新しい視点といえる。この政策を導き出したのが信円である。

信円は別当就任まもなく、寺辺新制を定めた。寺僧の身分を「学衆」と「禅衆」に分け、乗物・衣服・所従人数などの区別を明確にし、寺内組織を整えた。

文治二（一一八六）年。九条兼実が摂政氏長者となり、南都復興はスムーズに行なわれた。しかし、この大事業は信円にとってかなりの重圧であった。別当職三年目の寿永二（一一八三）年信円は兼実に「凡世上事如夢」寺務及び僧正を辞退したいのだが如何と、弱音を吐

いている。

文治元（一一八五）年、東大寺大仏開眼法要で呪願師を勤め、文治三（一一八七）年、兼実の息良円が入室。そして文治五（一一八九）年、三七歳で八年間に渡った別当を辞任した。新別当覚憲が引き継いでいく。（表一参照）隠退はしたものの寺内で指導力は変わることはなかった。

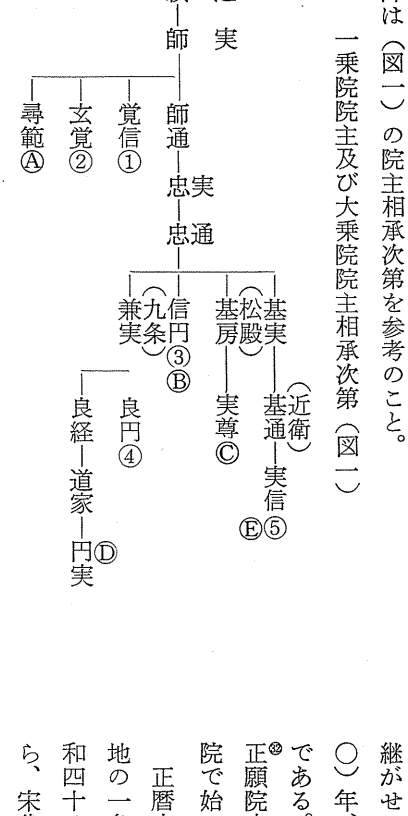
元仁元（一二二四）年一一月十九日、信円は菩提山正願院にて入滅した。享年七二歳。

3　二つの院家

一乗院・大乗院の両院は交互に別当を出し興福寺を支配した。一乗院は近衛家の子弟が、大乗院は九条家の子弟が入るという原則の源は信円にある。この両門体制成立については安田次郎氏が前掲の論文で的確に論じておられるので、その線に添って述べてみたい。

以降は（図一）の院主相承次第を参考のこと。

一乗院院主及び大乗院院主相承次第（図一）



一乗院院主相承は①～⑤

大乗院院主相承はⒶ～Ⓔ

一乗院は十世紀末建立され、四代頼尊の時寝殿等をもつ本格的院家が作られ、五代覚信から代々摂関家子弟が入った。

一方、大乗院は、一一世紀末、隆禅が建立し、摂関家出身の尋範が入ってから有力な院家となった。

信円はもと〳〵一乗院院主であったが、師の尋範が入滅した後、両院家を掌握した。院主になるということは院に付随する別院、末寺、荘園、座を支配することで、信円は興福寺最大の権力者となった。信円は両院家の相承を一人にしぼることはせず、一乗院を九条家良円に、大乗院を松殿家実尊に譲った。

良円は九条兼実の息で文治三（一一八七）年、信円に入室している。入室については、『玉葉』に詳しい。一乗院院主になった年は不明だが、承元二（一二〇八）年以前か。

信円は晩年、菩提山正暦寺内に、念願の別院正願院を建て、良円に継がせる予定であったと思われる。ところが良円は承久二（一二二〇）年、信円生存中に四二歳で一乗院にて入滅した。信円六八歳の時である。良円は恐らく信円が最も正統と考えた弟子であろう。良円は正願院内の伽藍常光院の墓に葬られた。翌年から故良円の仏事が常光院で始められる。

正暦寺では、伽藍常光院（寺伝では浄光院）の地名のみ残され、跡地の一角に、信円・良円・基房と伝えられる三基の墓があった。（昭和四十八年本堂下に移転）鎌倉期の宝篋印塔である。その内一基から、宋代龍泉窯の青磁骨蔵器（国重文）が発見されている。

正暦寺では代々、良円を正願院二世として供養して来た。明治以前

と思われる良円の位牌がある。そこには「当山正願院第二世良円　不生位」と刻まれている。

一方、大乗院を継いだ実尊は、信円と同母兄松殿基房の息で、良円より一歳年下である。信円にとっては一番血の濃い甥である。『大乗院日記目録』治承五（一一八一）年条に、わずか二歳で信円に入室と記する。安田氏は前掲の論考で「二歳という幼さは異例であるが、基房は治承三（一一七九）年、平氏のために失脚、流罪の憂き目にあっており、松殿家の没落が信円をしてこの不運な甥をひきとらせたのであろう」（三四頁）と解釈されている。時に信円、二七歳。実尊にとって、信円は師であると共に親代りでもあったろう。『春日現権記』第四段「大乗院僧正事」として、故信円の中陰法要前夜、実尊は持病の喘息の発作が起り悲嘆にくれていると、夢に神鹿が現われ、病がなおり、無事法要を勤めることが出来たという。

実尊は、実質的に信円の後継者と見なされ、その墓地は唐招提寺にあるものの、「後菩提山」と号された。そして正暦寺も以降、大乗院に付属するようになった。

良円の夭逝で、一乗院は九条家良円、大乗院は松殿実尊という信円の構想は変更を余儀なくされた。信円の構想の中に入っていなかった近衛家[31]では、基通が息子実信を強引に良円に入室させ、さらに信円のように大乗院も継がせようと画策した。後鳥羽院を動かし、信円に近衛家領の一つ長河庄を譲って、建保五（一二一七）年、ようやく実信を大乗院実尊の弟子にすることができた。

近衛家の両院家兼帯をよしとしなかった信円は、承久の変後、九条道家の息円実を、大乗院実尊の弟子にした。実尊のあと一時的に近衛家実信が大乗院を継いだが、九条道家の孫、尊信を円実の弟子にすることで、大乗院は後々、九条家の子弟に相承された。ここに一乗院＝近衛家、大乗院＝九条家という構図が作られたのであった。

二　信円の夢、正願院

1　正暦寺復興と正願院建立

往時八六の房舎を構えたと伝えられる菩提山正暦寺は、治承四（一一八〇）年の南都焼き討で全山炎上、本尊薬師如来倚像（白鳳時代、国重文）を除いて焼失した。この事件には、信円が深く関わっている。[34]

寺伝では、南都五大寺の衆徒が反平氏軍を集結させた中に正暦寺衆徒も出兵し、そのために平氏の焼き討ちにあったとする。しかし、一部今に伝わる信円の日記を見ると、焼き討ちの日は、信円は菩提山に住んでいたのである。「南都追捕之由風聞之問、予雖住芽山（ボダイセン）南都近所間、俄渡内山慈源坊了」とあって、危険を感じた信円は内山永久寺慈源坊に移った。翌日の記事も伝わっている。[35]「官兵等於可拠所々山寺之由風聞、仍立隠上山中、然而無殊事、申剋許還住慈源房了」　官兵があちこちの山寺を探索しているらしいと聞き山の奥まで逃げたが大丈夫だったので慈眼坊にもどったという。カリスマ性のある信円は平氏にとって当時、危険人物であったろう。

その後、正暦寺を再興し、別院正願院を立てて自分の終焉の地とした信円であるが、正暦寺焼失に対する自責の念が強く、また長年愛着の強い地であるが故に、自坊を正願院として発展させ理想の宗教空間を作ろうとした。

正暦寺復興と正願院建立を次のようにまとめてみた。

〈正暦寺関係〉

②一一八一（養和元）
正月　清盛のため寺領没収

④一一八七（文治三）
源頼朝が「更壱千貫文ノ寺産被ニ相寄ニ」

一一八九（文治五）

⑤八月井山五ヶ条掟法

⑥一一九四（建久五）
三月十日井　山井大宅寺防示定之

⑦一二〇八（承元二）
四月十六日　井山御経蔵建立

⑧一二一八（建保六）
井山本堂建立之、本尊丈六阿ミタ
幷小仏薬師

①⑤⑥⑦⑧⑨⑩は「大乗院日記目録」より引用。②④は正暦寺文書「菩提山正暦寺原記」③は内山永久寺置文に載せる「菩提山僧正御暦記」からである。

〈正願院関係〉

①一一八〇（治承四）
正願院自元建之

③一一八六（文治二）
七月十五日　正願院本尊弥勒仏開眼供養、本尊は三尺、皆金色で運慶の作、開眼尊師内山蓮恵随念房聖人

正願院自元建之

正願院自元建之

⑨一二二〇（承久二）
五月十四日　僧正良円入滅四二
井山常光院御墓

⑩一二二一（承久三）
故良円僧正仏事、於井山常光院長日修之始

まず建立の経過を見ると、正願院の方が早く着手され、③文治二（一一八六）年本尊仏の開眼供養が行なわれた。信円が別当に在職中である。正願院完成については①⑤⑥と三説があって、一番おそい⑥建久五（一一九四）年説を取っても正暦寺本堂は完成していなかった。

正暦寺建立は⑦承元二（一二〇八）年、まず経蔵が完成、⑧建保六（一二一八）年にようやく本堂が建立された。兵火で焼けた治承四（一一八〇）年から、実に三八年の歳月がかかったのである。

尋尊の「大乗院寺社雑事記」文明十（一四七八）年六月二六日の条によると、正願院本尊は菩提山根本之仏で、本願大僧正（信円）は「正願院御堂、中門、奈良大門被建之」次に「次薬師堂塔、真言堂以下者、至後代次第〳〵造営立了」とあって、まずは正願院御堂が、次に門が建てられた。中門は正願院の門であろう。奈良大門は現在正暦寺境内の入口に地名として「ダイモン」が残る地にあったと思われる。昭和三十年代まで門は存在していたが台風で倒壊してしまった。外からの侵入を防ぐため、門はいち早く建立された。正願院が一応の完成を見てから、薬師堂塔、真言堂が建てられ、あとは何年にもわたって造立が続けられたと尋尊は述べている。

⑧本堂建立にあたり、本尊として丈六阿弥陀仏と小仏薬師如来の二体であったとは興味深い。小仏薬師如来は現存する本尊薬師如来倚像でほぼ四十センチメートルの白鳳期の金銅仏のことにまちがいない。阿弥陀仏は本堂下中尾谷に法然の弟子と称する念仏聖人達が住み念仏信仰の地であったことと関連するだろう。

大事な記事に⑥建久五（一一九四）年、正暦寺と大宅寺との境界を定め、境内を確定したことがある。[38]大宅寺は不詳であるが恐らく西にひと山越えた山村か一説には白毫寺付近といわれている。

伽藍造営の費用はどう捻出されたのであろうか。②養和元（一一八一）年、兵火の後、正暦寺の寺領は他の大和国の各寺領と共に、没収された。がその後恐らく返還されたであろう。

④文治三（一一八七）年、源頼朝から一千貫文が正暦寺再興資金として寄進されたという。正暦寺文書にその御教書と言われる文書の写しが残っている。

再建資金となったのは、寄進を受けた田畠や金銭であったことは当然である。元久元（一二〇四）年、「菩提山十三重御塔」に寄進した田を沽却するという売券はその事例である。また、米や銭を貸し付けて利潤を上げることも行なわれた。[40]元久三（一二〇六）年の文書では、「菩提山本堂修理米」は貸し出され、利息を付けて返還されるべきものであったことがわかる。この年、本堂はまだ完成していない。

さて、前掲、元久元年の売券には、「菩提山聖人」という名が見える。当時、菩提山聖人として知られているのは専心という勧進僧で、興福寺北円堂造立に際し、肌身離さず持っていた白檀の弥勒仏を北円堂中尊の中に奉籠したことが願文に見える。建暦二（一二一二）年のことである。恵心は北円堂勧進にあたっていたのである。

専心が信円のもとで菩提山の山内経営にたずさわっていたことは、先述の元久元年の売券に署名していることでわかる。また、建保七（一二一九）年三月二八日付の信円の御教書は吉野金峰山と高野山の境界争いに対して高野山に向けて出されたものであるが、最後に「専心奉」との署名がみえる。[41]

また専心は笠置上人貞慶と親交があったらしく、笠置寺に伝わる建久七（一一九六）年の弥勒講式の奥書に貞慶は、「依芽山作也」と記している。この「芽山」は専心を指す。[42]

専心以外の勧進上人がいる。寛喜三（一二三一）年、法隆寺金堂阿弥陀仏と脇士を新しく鋳造した際の大勧進に「菩提山静恩浄覚房幷賢了房観俊法師」がいる。また賢了は弘長二（一二六二）年岡本寺（岡寺）塔修理の勧進上人であり「菩提山住」との記録がある。菩提山再興にはこの様な勧進上人の活躍が考えられるのである。[43]

山内経営にかかせないものに規律の制定がある。先述⑤文治五（一一八九）年八月の「芽山五ケ条掟法」がそれで、同年五月に信円は別当を辞任し、菩提山の再建に本腰を入れ始めている。

この「菩提山五ケ条掟法」は現存していない。が、それを推測する手がかりはある。それは正暦寺と兄弟ともいえる似かよった寺、内山永久寺の例である。永久寺は信円の師尋範が支配していた寺で、尋範没後は大乗院別院の一つとして信円が領有していた。信円在世中に出された掟法[45]が七種伝わっている。正暦寺の掟法もそう変わりはないはずである。

元暦元（一一八五）年の掟である。

女人不可出入諸房事

山門住房不可譲他所人、沽却同前

山内不可乗馬事

不可打双六事

不可打毬打事

湯屋入堂不可指要刀事
背起請輩不可見隠、又不可申致無実事

①女性の諸房出入の禁止。実は但とあって「世間騒動怖畏之時」と「仏事聴聞」の時は許された。②房舎を勝手に他所の人へ譲ったり売ったりしてはならない。③下馬のこと。④双六など賭博禁止⑤打毬など遊興禁止⑥湯屋に刀はもちこまないこと。⑦この起請に背いた者は逃げ隠れせず、うそを言わないこと。以上は一番基本的な規律といえよう。

後世になるが、「大乗院事社雑事記」文明三（一四七一）年三月二七日条には、尋尊が菩提山に申し渡した三ヶ条掟法がある。

①寺中での女人夜宿の禁止。

②寺中で、ニラ、ネギ、ニンニク、魚肉を用いてはいけない。

③学衆も禅衆も自分の坊舎を俗縁の人、主任（かっての主人か）に売買してはいけない。いつの世も変わらぬ制札の内容である。

2　正　願　院

信円は若い時から、菩提山の他に自分の別院正願院を建てることを構想していた。信円は正願院にどんな夢を作り上げようとしたのだろうか。それを察せられる文書がある。建保三（一二一五）年一二月「大和勾田荘用途注文」[46]である。

一乗院領勾田庄（天理市勾田町か）の庄務は大僧正（覚信）・中僧正（玄覚）・伊豆僧正（恵信）と五身（自分信円）と四代にわたって行なってきたが、現在は一乗院の特別な所役もないので、一乗院長講堂所用の充分他をのぞいた残りを正願院に割り充て、庄務も正願院が行なうという内容である。この正願院分は、「先考（父）先比（母）五身（信円）」の忌日と春秋二季彼岸仏事の費用に充てたいと述べる。

信円が正願院に描いた夢の形は次の二つの史料から探れそうである。一つは興福寺文書における寛喜二（一二三〇）年四月二十日付の「正願院仏事用途所当注進状」[47]であり、もう一つはよく似た内容の「三箇院家抄第三」の一連の史料である。この二つの史料から、正願院の組織がおぼろげながら見えてくる。

正願院付随の伽藍常光院には二つの主要な建物がある。一つは門の近くの十三重大塔でもう一つは、塔の奥にある大講堂（弥勒堂）である。塔に関する仏事、費用等は御塔方、大講堂に関することは御堂方として、正願院の仏事、荘園の所当等は大半がこのどちらかに宛てられた。

御塔方、御堂方両者とも毎日勤めなければならないのが念仏唱号である。御堂方は弥勒の宝号、御塔方は釈迦の宝号を断やさずに唱号する不断念仏で、各々念仏所と念仏衆がおかれた。念仏衆は各一二人で四人一組となって十日毎に交替した。念仏所に支給された畳は六畳分で、これを敷き詰めた六畳分が念仏所の広さかも知れない。「三箇院家抄第三」に御堂方、御塔方の各念仏衆の規律が記されている。まず御堂方の番衆の規律七ヶ条。

貞応三（一二二四）年一一月二十日信円入滅の次の日から仏事が始められた。

①毎時始持十善戒、満尊勝陀羅尼三反、可令祈請過去聖霊幷念仏本願上人証大菩提兼院家安隠之由者」で始まる。欠席は科怠に処す、番

衆・代官以外は勤仕させない事、番衆が遅刻して少しでも仏事が始まっていたら途中から加わらず次の番に入る事、代官は一人で決裁せず評定の場を持て、順番に四人が念仏所に参宿して御堂を守護せよ、仏具等が紛失したら番衆と承仕が沙汰せよという内容である。一方御塔方の掟は建久七（一一九六）年日付で記され、この年までに十三重御塔は完成していたことがわかる。御塔方の掟は厳しい。①当番四人は一人も欠席せずに夜宿せよ。②よく知らない者や幼い者を代官にするな。

③火事、盗賊等出来之時者、番衆最前合声可吹蜍者（全員で声をあげ法螺を吹けということか）④念仏所には「弓箭」（弓矢）を置け。御堂方に比べて異様なほど厳しく臨戦体制をとっているが、古絵図を見ると御塔は門に近く院家を守る警備所を念仏所が兼ねていたようである。

御堂方・御塔方の活動を対比した（表二）

正願院御塔方と御堂方仏事

御塔方	御堂方
本尊　釈迦如来 舎利講式読 不断念仏は釈迦の宝号 念仏所番衆12口 〈月忌〉 定信、善慶、	本尊　弥勒菩薩（運慶作） 弥勒講式読 不断念仏は弥勒の宝号 念仏所番衆12口 過去聖霊、信円菩提、 院家安穏を祈請 〈月忌〉 皇嘉門院、藤原忠通（信円父）、源俊子（信円母）、恵信（信円兄）、蔵俊（信円学師）、尋範（信円師）、阿母比丘、後に実尊、藤原信実
〈仏事〉 魔界廻向、涅槃会、最勝王経転読他、信円入滅後舎利講	〈仏事〉 十善戒、布薩、三蔵会上宮会、浴像会他

月忌、忌日供養は主に弥勒仏のいる御堂でする。皇嘉門院聖子（信円姉）、藤原忠通（信円父）、源俊子（信円母、中御門殿）、恵信（信円兄、師）、尋範（信円の師）、そして蔵俊（信円の学師）、阿母比丘（不詳）で後世、実尊、藤原家実と数人の僧尼が入っている。御塔の定信、善慶は不詳である。

仏事を見ると、法相宗らしい三蔵会と戒律にかかわる「布薩」、「十善戒」が目につく。「十善戒」はおそらく十善戒の法文を唱える易行も加えられていたのではないだろうか。常光院の十善戒仏事には、俗男女の参詣を受け入れるとの記述がある。

また信円忌日の一一月一九日には管絃、舞楽を交えた盛大な舎利講が行なわれ、多くの参詣があると一円無住は「沙石集」で述べている。

正願院領は興福寺を本所とし、仏事等の費用別に収支が細分され、中にはごくわずかな得分を差し出すだけのものもある。主なものを挙げると

①御堂方……波多庄、大宅寺庄、勾田庄、小山戸庄、釈土寺庄、中山庄、水涌庄（以上大和国）清原庄（不詳）

②御塔方……中山庄、奈良坂庄、荻庄、針庄、小夫庄、鞆田庄、端室庄、八嶋（以上大和国）山尼庄（不詳）

その他、信円一代に限り寄進された摂関家領長河庄（奈良県北葛城郡広陵町）と皇嘉門院忌日供養用途のために今泉庄から綿が進上され

ている。今泉庄は摂関家領和泉国と解釈されてきたが、「玉葉」寿永二年三月一七日条に、故皇嘉門院領として信円に越前の今泉庄が譲られたという記事があり、越前国と解釈したい。

正願院は江戸時代の古絵図を見ると、常光院、正願院と思われる院家、鎮守社六所社（熊野、吉野、春日、八幡、白山、大龍王）。常光院には弥勒大講堂、十三重大塔、御影堂、経蔵、と墓所（信円、良円、基房）と門が描かれている。

正願院の本尊弥勒仏は運慶作で金色、三尺であったことは先に述べた。

尋尊作とされる興福寺文書「本尊目六」（美術研究第五八号　一九三六年）に正願院の絵を記している。

①正願院十三重塔障子の絵一六鋪

法相八祖、聖徳太子、良弁、智証、恵灌、玄弉三蔵、義淵、鑒真、伝教大師、弘法大師

②正願院堂後障子

来迎菩薩一鋪　　尊智法眼筆

③正願院経蔵下陣壁代

毗沙聞天等四天　四鋪　各住吉法眼

④正願院彼岸本尊

尺迦阿弥陀　二鋪　各住吉法眼筆

以上の絵画は尋尊以前に正願院から大乗院に移されたものであろう。

以上の様に正願院のあり方を考えると、二つの方向性に気づく。一つは、父母、兄弟、師匠等と信円自身の追善供養の場、墓所としての正願院である。もう一つは、信仰の場としての正願院である。

信円の生きた時代、席巻していたのは末法思想で、それは一つの終末思想でもあった。現世に救いなく、釈迦の教えも理解されなくなる。来世、阿弥陀仏の住む極楽浄土への死後の再生を人々は夢に見た。これが阿弥陀信仰である。法然の専修念仏に対し、南都の革新的な人々は、釈迦信仰と弥勒信仰を深めて、釈迦や弥勒仏の宝号を唱える簡単な修行をあみ出したのである。

釈迦の時代が熱烈に希求され、戒律を見直し、生身の釈迦と生きてみたいという思いは釈迦信仰として燃え上った。が反面、釈迦は過去の人であり、いくら思慕しても生身の釈迦には会えない。そこで釈迦入滅後五七億七千万年後に降臨して仏弟子を救う弥勒仏への信仰が広まった。釈迦と弥勒仏は同体で、弥勒信仰と釈迦信仰は表裏一体と考えられた。

この様な南都の新しい動きは、見事に正願院に具現化している。御堂の弥勒念仏、御塔の釈迦念仏。信円は弥勒・釈迦二つを合わせ持つ新しい浄土を作り、そこに身を置いてみたかったのではないか、それが「信円の夢」ではなかったかと考えている。

むすび

菩提山本願信円は、スケールの大きい政治家だと言われつつ、中世大和の歴史を語る上でしか取り上げられたことはなかった。安田次郎氏の論考（前掲）は、信円が興福寺、奈良、大和国の中世的体系を方向付けた人物として、明確に解き起して下さった。今回、多くの御教示を受け感謝している。

正暦寺に伝わる口碑に、山内の名勝を選んだ「名所十景」がある。旧正願院の地には「六所の夜の雨」と「(常)浄光院の晩鐘」の二つ。現在は田畠に変わった常光院から見る夕暮は、晩鐘こそ聞こえないが、今もなお美しい。

註

① 永島福太郎　奈良文化の伝統　一九四四年。
② 尊卑分脈。
③ 大乗院日記目録　応保元年条。
④ 玉葉　文治三年一月一七日と十月二七日条。
⑤ 大乗院寺社雑事記　康正三年六月八日条。
⑥ 史窓二八号　日下佐起子氏「平安末期の興福寺―御寺観年の成立―」一九七〇年。
⑦ 別当次第　恵信　隆覚　大日本仏教全書　興福寺叢書二。
⑧ 前掲　別当次第　恵信。
⑨ 大山喬平　『近衛家と南都一乗院―「簡要類聚抄」考―』日本政治社会史研究（下）岸俊男教授退官記念会編　塙書房　一九八五年。
⑩ 大乗院日記目録　仁安元年条。
⑪ 別当次第　恵信。玉葉　仁安二年五月一五日条。
⑫ 鎌倉時代における唯識教学の展開　北畠典生　日本仏教宗史論集二　南都六宗　吉川弘文館　一九八五年。
⑬ 前掲　別当次第　蔵俊。
⑭ 玉葉　承安二年四月二八日条。
⑮ 玉葉　安元二年五月二四日条。
⑯ 玉葉　安元三年二月一五日条。
⑰ 玉葉　安元三年七月七日条。
⑱ 別当次第　尋範。
内山永久寺置文　「改訂天理市史」史料編　第一巻　天理時報社　一九七七年。
大乗院日記目録　承安三年六月二八日条。
⑲ 同書　承安四年四月九日条。
玉葉　安元三年八月四日条。
⑳ 玉葉　治承四年七月一四日条。
永島福太郎　奈良　吉川弘文館　一九八六年。
㉑ 玉葉　治承五年正月六日条。
㉒ 玉葉　治承五年正月二四日条。
㉓ 永島福太郎　前掲⑳に詳しい。
㉔ 安田次郎　中世興福寺と菩提山僧正信円　大隅和雄編「中世の仏教と社会」に所収　四二頁　吉川弘文館　二〇〇〇年。
㉕ 安田次郎　前掲　四八頁。
㉖ 平安遺文　三九六八。
㉗ 玉葉　寿永二年一一月二六日。
㉘ 鎌倉遺文二三七五　高野山と吉野金峰山との境相論の調停等に信円の指導力がみえる。
㉙ 玉葉　文治三年一月七日条　同年十月二七日の条。
㉚ 別当次第　良円。
㉛ 大乗院日記目録　承久二年条。
㉜ 大乗院日記目録　承久三年条。
㉝ 大山喬平氏　前掲。
㉞ 菩提山正暦寺原記　正暦寺文書　応永一六年　尊胤の奥書がある。
㉟ 大乗院日記目録　治承四年条。
㊱ 前掲　内山永久寺置文。
㊲ 拙稿　和州菩提山正暦寺中尾谷と浄土信仰―牙舎利信仰をめぐって―『史窓』四九号。
㊳ 日本歴史地名大系三〇　奈良県　大宅寺　平凡社　一九八一年。
㊴ 鎌倉遺文一四の一一一四六。
㊵ 鎌倉遺文三の一六〇八。
㊶ 鎌倉遺文四の二四八五
㊷ 奈良国立博物館　講式―ほとけへの讃嘆―　一九八五。
㊸ 法隆寺別当次第　範円　続群書類従第四下。
㊹ 右同　良盛。

㊺ 前掲　内山永久寺置文。
㊻ 鎌倉遺文　四の二二〇五。
㊼ 鎌倉遺文　六の三九八三。
㊽ 三箇院家抄　史料纂集　一九八一年。